
ヌクモリ

工藤 香

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヌクモリ

【Nコード】

N9983B

【作者名】

工藤 香

【あらすじ】

これは本当にあつた話。大切なモノは、近すぎて気付かなかった昔の事。そして、大切なモノを失った今、後悔だけを残していたアタシは一生の宝物だけをもち、生きている。

出会い

これは

本当のアタシの実体験

過去がやっと整理できた

だから

アタシの再出発のため

思い出を整理するために

書きます。

逢いたくて

逢いたくて

逢いたいから逢いに行き

時間がなくても逢いに行く

時間がないのが
わかっていても

逢ってしまうと

離れる事ができなくなってしまう

でも

アタシをそんな気持ちにさせる男は

アタシの男ではないし

2度と逢う事もできない。

最悪な奴

その男がアタシの人生に関わり始めたのは

アタシが中学3年の時

今でもあの日の事は

忘れる事が不可能な程

衝撃的な出会いだった

その年の夏は
それまでの夏と
変わらない暑さで

あの日だって

長い一生のうちの
普通の一日にすぎない

はずだった。

アタシは兄の悠布^{ゆう}に

届けモノをしに

悠布の住むマンションに
向かって自転車を飛ばした
兄の悠布は

自分と親の

考えの不一致から

家を出て、今は

祖母の持つマンションに住んでいた

親に逢いたくてないため

実家に置いてあるモノで

必要なモノを届けてほしいとアタシは、
たまに頼まれていた
マンションの前に
自転車を置き

自動ドアを抜けた

いつも思う

オートロックは面倒だと

部屋番号を押しても

兄がでる事は
ほとんどない

仕方なく

靴の中からリモコンを探しまた自動ドアを抜ける

少しベージュがかった

エレベーターは

光を反射しアタシの後ろで動くモノを映していた

いかにもホストのような男が近づいてきていた

エレベーターは

あと少しでアタシの元へ来る

アタシは何故か

その男とエレベーターに乗るのが嫌で携帯に目を落とした。

エレベーターが到着した時

アタシは返信の必要のない

メールを見て携帯から目をはなさす”

その男が
アタシを無視して
行ってくればイイと
願っていた

でも

その男は以外に律儀で
『開』のボタンを押し
アタシが乗り込むのを待っていた

それを

わかっていただけ

何かがアタシを止めていた

気まずい沈黙が続き

遂に痺れをきらした男は

「来てんの、わかんねーの？ テメーみてえなガキに手だすほど困ってねえんだよ！ いらねえ妄想ばっかしてんじゃねえよ」

初対面の相手に言うとは

常識では考えられない程の言葉を発した

一瞬だったけど

一分くらいは沈黙したまましばらくアタシ達は目がかちあっていた

やっこの思いで

絞り出したアタシの声は
どこか怒りで震えていた

「そんなん思うならアタシを無視していけばよかったじゃん！大体もう一つエレベーターあんだから平気なんだよ」

「・・・・・・・・乗れ」

その言葉で

仕方なくアタシはエレベーターに乗った

アタシの押そうと思ったボタンは、すでに光っていて
その男も同じ階にいく事がわかり嫌気がした

17階に着いた時

アタシは兄の部屋のある

角部屋まで競歩でいき

カードキーでドアのロックを解除しドアを勢いよく開け同じくらい
強くしめた。ドアを開けてスグに

煙草や食べ物やお酒の

混ざった臭いがして

奥からは知らない声ばかりしていた

廊下の奥の部屋には

案の定、悠布と同じ夜の世界で生きている人達がいたその中の一人
の男は

「あゝ香こちゃん悠布に用事？」

「うん。悠布は隣？」

「んゝいるけど一人じゃないから後でにしてコッチでお兄さんと話そうゝ」

「今日はイヤ。じゃあ悠布が終わったらコレ渡しておいて？アタシ帰るね」

部屋のドアを開けると

玄関のドアを開けて

廊下をズカズカ歩いてくる男がいた

それはさつき

エレベーターで逢った

常識を超えた失礼な男だった

第2話 辰弥

辰弥

その男は廊下の奥の部屋に突っ立っていたアタシに気付いて

「お前悠布の女だったん？ガキしぎてわかんなかったや？ゴメンな
あ」

ゴメンという言葉は謝る時に使うモノなのに

微塵も謝っている感じが感じ取れなかった

この男はどこまで失礼なんだという思いと

関わりたくない思いが
交じり合って

アタシはその男に体当たりするように家を出た

エレベーターを待っていると当時付き合っていた辰弥が降りてきた。

今さっきの出来事のせいで辰弥の声が優しさを帯びていた

「来てたん？遅いから送ってく」

「今日はイイよ？自転車だし。悠布の友達にアンナ失礼な奴がいると思わなかった。二度と逢いたくない」

「ハハハ。誰の事？お前が嫌いっていうの初めてだな？」

「名前知らないけど本当に失礼な奴！ああホストっぽい奴！」

「ん？思い当たる奴いすぎてわかんねえや。でも、今日はマジ遅いから送る。いくぞ？」

4歳年上の兄の悠布は
大学を中退してから
ホストをしていた。

辰弥は悠布の仕事仲間で

ヤケに意気のあつた二人は

よく悠布のマンションで飲んでいた

アタシもよく悠布のマンションに出入りしていたため
何度か逢ううちに

アタシは辰弥の優しさにひかれ、辰弥はアタシの間抜けぶりがほつとけず目で追ってた

一見全く告白には聞こえない告白をしてくれた

その日は辰弥に送ってもらい家に帰った。

第3話 距離感

距離感

中学3年の秋。

アタシには受験が迫っていた
兄と辰弥は中退したが
通っていた大学は有名な
私立大学だった

アタシは、そんな2人に
勉強を教えてもらうため

悠布のマンションに通っていた

あの日は

次の日が休みだったから

アタシは悠布の部屋に泊まる事になっていた

悠布達が仕事に行く時間

辰弥が、おもむろに

机に大量のA4の用紙をおいて、何気ない声で

「これ簡単だから5教科全部やっとかんだぞ。じゃ
その台詞を置いて
二人は出掛けていった

夜中に玄関のドアが開く音がした時本当に嬉しかった
辰弥の置いていった宿題は以外に難しくて解説がほしかったのもあったが

何より夜中に広いリビングで一人でいるのは淋しかった

そのためだっただろう

二人が仕事から帰るには
早すぎるとは感じつつ

アタシは満面の笑みで

「ご苦労様。早かったね？ねえ宿題教えて？わっかんないの」
アタシは自分の行動を反省した事は沢山あったけど

この時は自分の顔が真っ赤になるのがわかる程恥ずかしかった

玄関で不意を突かれたように立っていたのは

少し前にエレベーターで逢った失礼な男だった

男は

「本当聞いた通りの奴だな」
ぶっきらぼうに
それだけ言って

アタシの横を通り抜け
リビングに入っていた

恥ずかしさと

また逢った後悔に近い
イライラが残り

アタシは、しばらく

玄関に立っていた

顔の赤みを感じながらもフラフラリビングに戻ると
その男はアタシの宿題の穴を見ていた

「今は悠布と辰弥だと思ったから話しかけちゃったの！宿題は悠布
達に見てもらってから気にしないで」

慌てて言うアタシに

その男は冷静に

「一回しか説明しないからなあ」

意味が飲み込めない

アタシを無視して

その男は説明を始めた

男の説明はわかりやすかった

それが逆に気に入らなかったけど

アタシはその男の手から目が話せなかった

男の手はゴツゴツしていて男らしい手なのに

解説をしてるときの

指の運びがしなやかで

細長い指を際立たせていた

そんなアタシに気付いたのか只嫌みを言いたかったのか

男は、半ば呆れながら

「聞いてんの？大体何でコツチの難しい方が解けて基本が解けねんだよ？どうゆゝ解き方してんだ？」

男は怒りながらも

丁寧に教えてくれた

4教科目の解説をしてもらってる時

悠布達が帰って来た

辰弥は男を見て

「優大？来てたん？お前^{まへ}弥生^{やよい}ちゃんが探してたぞ？」

「いかねえよ？面倒なってきたから終わり」

「俺らに迷惑かくんなよ？」

「なるべく気いつけるや」

辰弥と優大と呼ばれた男が何の話をしていたかは詳しくわからなか

ったが

女の事だろうという想像はそれなりについた

悠布が机を見て

「何優大？香の勉強見てたん？意外だなハハハ」

「ここに着いた瞬間コイツに頼まれた」

「違うよ？悠布と辰弥だと思ったから・・・」

その言葉を聞いた悠布と辰弥に

「間抜けだなあ」

笑いをこらえながら

呟かれた。

「おい、集中しろよ。お前飲み込みおせんだよなあ」

「あのさ、優大君だっけ？スパルタすぎるから後は優しい優しい辰弥に教えてもらうね？怖かったけどわかりやすかったよ？ありがとね？」

その時優大と呼ばれた男は急に笑顔になって

「ハハハ！どういしました」

優大君の日本語は時々

変だと思っけど

アタシはその笑顔がツボだった
その日をキツカケに
悠布のマンションで
優大君と逢った時は

いろんな話をするようになり

兄が一人増えたような感じだった

第4話 優大君

優大君

優大君はアタシが何か言う度に爆笑しながら話を聞いてくれた

でもあの頃

優大君は自分の事はあまり話さなくて

何をやってる人なのか

悠布と辰弥と仲がよくなった経緯とかを

話そうとはしなかったけど
人には、いろんな人がいて
どんなに親しくても

大事なモノの価値観は
ミナナ違っている事を

アタシは子供ながらに
実感していた。

それにアタシには
仲良くなった人の過去は重要ではなくて

相手が話したい時に

話してくれれば
イイと思っていた

だから優大君が
何も自分の事を話さない事は気にする事ではなかった
高校の合格発表の日

普段は緊張する事なんて

あまりにも無さすぎたアタシは

吐き気に襲われていた

朝。家に来た辰弥は

アタシの蒼白な顔を見て

「見てきてやるから待ってなあ？」

その優しい言葉に
少し安らいだものの

待っているのも落ち着かないと思い

アタシはエチケット袋を握りしめ辰弥の車に乗った

車の中には優大君がいて

アタシの手に握られた
エチケット袋を見るなり

・・・爆笑した

少しア然となったからか
緊張が和らいで周りに
目がいくようになった

「あれ？悠布も今日付いてくるっていつてなかった？」

アタシの何気ない質問に辰弥は何気なく

「美玲^{みれい}の所行ったから戻ってこねゝなあ」

美玲ちゃんは悠布と
同年の子で

ずっと女にだらしなかった悠布が初めて落ち着いた
彼女だった

アタシも白くて綺麗な肌だねと言われた事はあるけど

美玲ちゃんの真珠のような白い艶のある肌を見た後では何も言えな
くなるくらい
白い肌で

細長く日本人離れた
しなやかな体の女性だった
お父さんがカナダの人だと聞いていた

美玲ちゃんは悠布の働く店の近くでキャバをしていて

悠布と美玲ちゃんには
共通の友人がいて

ある日いつもの様に
友人が友人を呼び
飲んでいた所に
フラッと現れた

ミナで飲むようになった
何度めかの時

美玲ちゃんが酔った勢いのようなもので

「好き」

おもむろに告白した

それに対して悠布は

「うん」

それだけだった

アタシも、その場にいたが

あの時の悠布の『うん』は今のまでの女の子達と変わらず

美玲ちゃんの『好き』の気持ちに比例していない感じがあった
けど、

それはアタシの勘違いで

今は誰が見ても

2人は互いを大事に思う関係になっ
ていて

妹として

とても嬉しい事だった

そんな事を考えていたら

受験した高校についていた

あまりにも

合格発表と掛け離れた事を考えていたアタシは

掲示板を見るための

心の準備が出来てなかった

辰弥が車のドアを開けてくれて手を繋いでくれた

「待つて？待つてね？ゴメンね？」

うるたえたアタシに優大君が

「お前にさ、勉強を教えた奴は、お前をよく知ってる奴なんだから
自信持てよ？一緒にいるから」

その優しい言葉に

気持ちが悪く着いたから

アタシは歩きだせた

アタシ達は3人で掲示板を見に行った

掲示板には沢山の

数字が書いてあったはずだけど

アタシには、ピンクの字が一つだけ見えた

実際には黒字だったけど

アタシには

掲示板に桜が咲いているように見えた

アタシは驚くわけでもなく

笑うわけでもなく

ただ、沈黙していた

凄く嬉しかったのに

アタシは嬉しすぎて声がでなかった

喉がつまっていた

声をだそうとすればする程何も言えなかった

それに気付いた2人は

爆笑しながらも

胴上げしようとしてくれた

今でもあの時の2人の笑顔は忘れられない

その日は朝がきても眠ろうとする人がいない程ミナで遊びまわった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9983b/>

ヌクモリ

2010年12月31日21時21分発行